

## 授業ふりかえり : 女子美サウンドデザイン演習 (2018年度)

担当：石井 拓洋

[www.iitak.com/sd2018/](http://www.iitak.com/sd2018/)

この授業をふりかえってみてください。D ドリアンスケールや、自らで選んだ音色の響きというモチーフから、どれほど多くのことを感じ取ること（表象を持つこと）ができましたか？ そして、その表象を音という素材で表現した経験をふりかえってください。うまくできましたか？ ただし、ここでは音楽作品が体裁よく作品という形になったか？ということではなく、むしろ、音のモチーフから多くを感じ取ること、そして、自分の表象を素材で具体化するというプロセス（表現すること）が、美術的表現の時と比べて、音楽の場合はどうであったかという観点で振り返ってください。

今回、音楽的表現を体験してみて、もし、上のプロセスがうまくいったと感じるならば、それを自らの強みや個性として自覚し、たとえば、美術的表現の中に広義に取り入れることを模索するのも良いでしょう。

一方、授業に積極的に取り組んだ上で、なお上のプロセスがうまくいかなかったと、もし感じるならば、それこそが個性なのであり、だからこそ、いわゆる「美術」という視覚的表現に取り組むことへの、経験に基づく確信を得る有意義な機会となるでしょう。また、うまくいかなかった人ほど、メディア固有の特性（「メディア論」的視点。「メディアはメッセージ」）の存在を実感することができたことと思います。

とはいえ、次のような抗弁があるかもしれません。今回の音楽的表現に先立つ「表象を

持つこと」のために与えられたのが、そもそも音楽的モチーフだったのであり、その表象の土壌がもとより「音楽」という固有の文脈だったことから、この体験を「美術」という、また別の固有の文脈になぞらえることは無理がある、と。つまり、「音楽」あるいは「美術」の各表現を行うに先立ち、やはり、それにふさわしいそれぞれの表象（表現の元となるイメージ）が「ある」ということを前提とした考えです。しかし、この考えには、果たしてどれほど根拠があるのでしょうか。その正しさをどのように説明できるのでしょうか？

ここで20世紀の思想家たちの営みを参照するならば、上とはちがう視点を立てる根拠が得られます。つまり、20世紀における思潮として指摘しうるのが、音楽や美術にかかわらず、すべての表象の源には言語があるという考え方です（詳しくは、「言語論的転回」や「記号論」という用語や領域をあたってください）。たとえば、「美しい」や「躍動感がある」などと感じることの根源には、そもそも私たちが普段使用している言語のあり方（たとえば、日本語などの体系）が作用しているというのです。これ（いわば「記号論」的な考え）を前提とするならば、音のモチーフからでも、色・形・空間のモチーフからでも、いずれのモチーフからでも、もとより表象するための力の根源は言語であり、表現に先立つ前段階では「音楽」も「美術」も、区別がないという考え方を説明することができます。

さらに、上の20世紀の思想はまた、そのような言語自体が意味的に開かれたものであることも指摘しています。つまり、ある言葉の指し示す意味が固定されたものではなく、新たな意味が付される可能性を持っているというのです（記号論における言語の「詩的機能」）。このことから、「音楽」という言葉で指し示す対象となる、いわば〈おんがく〉というものは、決して固定した内容・指示対象ではないということが言えます。

なるほど、表象を持ったその先の段階としての「表現」において、その実際の面では、「音楽」と「美術」とのそれぞれに、ある程度の表現上の固有の世界が無為に立ち現れて

きます。しかし、そうだとすると、その実相とは、単に「異なる『固有の世界』がある」ということ、それ以上でもそれ以下でもないはずですが、そして、そのような違いは、もとより、「美術」と「映像」との間にも存在しているはずですが、「美術」の皆さんは、なぜか「映像」ならば抵抗なく取り組んだりします。ならば、たとえば、「自分は美術の人であるので、音楽は苦手だからできない」とするのは、「音楽」・「美術」という言葉の差異自体ではなく、それらの語の周辺に付随するものを過剰に捉えてのことかもしれません。つまるところ、虚心坦懐な〈おんがく〉なるものを見ているのではなく、上の二者を殊更に「違うもの」とする「慣習」を自明視し、さらに、なにか個人的な記憶が、〈おんがく〉に横滑りして、そこに特殊な色合いをつけた形で、思考を固定しているのではないのでしょうか。いずれにせよ、意味論的に閉塞したこのようなプロセスで自らの態度を決めてしまうとするならば、それは、藝術を〈敢えて大学の場に足を運んで学ぼう〉とする者において、そもそも「足を運ぶ」意義を、根底から失することと思われるので残念だということです。

先にのべた、いわば「記号論」的というべき前提に基づくならば、発想する、考える、創造するとは、つまるところ、言語の既成のあり方を批判し、それを組み替えていくことに集約されます。絵や音の表象や表現に先立って、われわれは言語においてそのような営みを行なっている。そこに「音楽」も「美術」もない。特に、藝術（または「アート」）をめぐる今日的な問題解決において、そこで必要とされる根本的な発想力や創造力とは、つまるところ、このような言語のあり方への開かれた捉え方に集約されると考えます。

担当者としては、今回、皆さんに対し、殊更に「音楽」を好ましいものと捉えるに至ってほしいとか、今後積極的に取り組んで欲しい、などということ、この授業を通して主張したわけではありません。そうではなくて、普段とは違うモチーフを前にしたこのたびの表象と表現の体験から、多様な想像力を膨らませる可能性があることに気づき、また、そのような想像力を美術的表現に役立ててもらいたいということ、これを最大の願いとして意識したものであります。

(2018年7月26日)